

コンクリートライブラリー156 鉄筋定着・継手指針[2020年版]

正 誤 表 (第1刷対応)

2020.8.24

編	頁	行、図・表番号	誤	正
I 共通編	20	表 3.4.1 高サイクル繰返し 特性の行	下記のとおり	下記のとおり
I 共通編	34	解説表 3.6.1 弾性域正負繰返し 試験の強度の行	下記のとおり	下記のとおり
V 機械式 継手編	156	下から 7～6 行目	公的認定機関の認定を受けた検査者として、日本鉄筋継手協会が規定する鉄筋継手部検査技術者、鉄筋継手管理技士、機械式継手管理技士などが挙げられる。	公的認定機関の認定を受けた検査者として、日本鉄筋継手協会が規定する鉄筋継手部検査技術者、 鉄筋継手管理技士 、 機械式継手管理技士 などが挙げられる。
改訂資料	274	22 行目	標準フックと同等でない定着部を有する部材の解析には相当の技術を有すると思われる。	標準フックと同等でない定着部を有する部材の解析には相当の技術を 要する と思われる。

表 3.4.1 【誤】

表 3.4.1 軸方向鉄筋と横方向鉄筋の定着体の特性

定着体の特性	特性の条件	軸方向鉄筋	横方向鉄筋	評価の分類	記号
強度および抜出し量	表 3.4.2 に従う	○	○	あり	A
せん断補強特性	表 3.4.3 に従う	-	○	あり	R
高サイクル繰返し特性	試験値あるいは <i>S-N</i> 線図	○	○*	*	-
高応力繰返し特性	表 3.4.4 に従う	○	○	あり	S
じん性補強特性	表 3.4.5 に従う	-	○	あり	T,T(L2)
その他(特殊な使用条件)	上記以外の特性	○	○	-	-

*3.4.4 で確認された定着体の疲労強度が折曲げ部を有する鉄筋以上であることを確認する。標準フックの疲労強度は「2017年制定コンクリート標準示方書 [設計編：標準]」7編 3.4.3 に従って算定するものとする。

表 3.4.1 【正】

表 3.4.1 軸方向鉄筋と横方向鉄筋の定着体の特性

定着体の特性	特性の条件	軸方向鉄筋	横方向鉄筋	評価の分類	記号
強度および抜出し量	表 3.4.2 に従う	○	○	あり	A
せん断補強特性	表 3.4.3 に従う	-	○	あり	R
高サイクル繰返し特性*	試験値あるいは <i>S-N</i> 線図	○	○	-	-
高応力繰返し特性	表 3.4.4 に従う	○	○	あり	S
じん性補強特性	表 3.4.5 に従う	-	○	あり	T,T(L2)
その他(特殊な使用条件)	上記以外の特性	○	○	-	-

*3.4.4 で確認された定着体の疲労強度が第II編 3.2 および 3.3 に示す評価基準フックの疲労強度以上であることを確認する。
評価基準フックの疲労強度は「2017年制定コンクリート標準示方書 [設計編：標準]」3編 3.4.3 に従って算定するものとする。

解説表 3.6.1 【誤】

解説 表 3.6.1 機械式継手単体の特性判定基準

		SA 級	A 級	B 級	C 級
一方向 引張試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			$f_t \geq f_{yn}$
	剛性	$E_{0.7f_{yn}} \geq E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.9E_s$	$E_{0.7f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.7E_s$	$E_{0.5f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.5E_s$	$E_{0.5f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.7f_{yn}} \geq 0.5E_s$
	伸び能力	$\epsilon_u \geq 20\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.04$	$\epsilon_u \geq 10\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.02$	$\epsilon_u \geq 5\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.01$	—
	すべり量	$\delta_s \leq 0.3\text{mm}$	$\delta_s \leq 0.3\text{mm}$	—	—
弾性域正負 繰返し試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			—
	剛性	$E_{20c} \geq 0.85E_{1c}$	$E_{20c} \geq 0.5E_{1c}$	$E_{20c} \geq 0.25E_{1c}$	—
	すべり量	$\delta_{s(20c)} \leq 0.3\text{mm}$	$\delta_{s(20c)} \leq 0.3\text{mm}$	—	—
塑性域正負 繰返し試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			—
	すべり量	$\epsilon_{s(4c)} \leq 0.5\epsilon_y$ $\delta_{s(4c)} \leq 0.3\text{mm}$ $\epsilon_{s(8c)} \leq 1.5\epsilon_y$ $\delta_{s(8c)} \leq 0.9\text{mm}$	$\epsilon_{s(4c)} \leq \epsilon_y$ $\delta_{s(4c)} \leq 0.6\text{mm}$	—	—

解説表 3.6.1 【正】

解説 表 3.6.1 機械式継手単体の特性判定基準

		SA 級	A 級	B 級	C 級
一方向 引張試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			$f_t \geq f_{yn}$
	剛性	$E_{0.7f_{yn}} \geq E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.9E_s$	$E_{0.7f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.7E_s$	$E_{0.5f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.95f_{yn}} \geq 0.5E_s$	$E_{0.5f_{yn}} \geq 0.9E_s$ $E_{0.7f_{yn}} \geq 0.5E_s$
	伸び能力	$\epsilon_u \geq 20\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.04$	$\epsilon_u \geq 10\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.02$	$\epsilon_u \geq 5\epsilon_y^{**}$ かつ $\epsilon_u \geq 0.01$	—
	すべり量	$\delta_s \leq 0.3\text{mm}$	$\delta_s \leq 0.3\text{mm}$	—	—
弾性域正負 繰返し試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			—
	剛性	$E_{20c} \geq 0.85E_{1c}$	$E_{20c} \geq 0.5E_{1c}$	$E_{20c} \geq 0.25E_{1c}$	—
	すべり量	$\delta_{s(20c)} \leq 0.3\text{mm}$	$\delta_{s(20c)} \leq 0.3\text{mm}$	—	—
塑性域正負 繰返し試験	強度	$f_t \geq 1.35f_{yn}$ 又は f_{un}			—
	すべり量	$\epsilon_{s(4c)} \leq 0.5\epsilon_y$ $\delta_{s(4c)} \leq 0.3\text{mm}$ $\epsilon_{s(8c)} \leq 1.5\epsilon_y$ $\delta_{s(8c)} \leq 0.9\text{mm}$	$\epsilon_{s(4c)} \leq \epsilon_y$ $\delta_{s(4c)} \leq 0.6\text{mm}$	—	—